

## 最近のトピックス

## Squamous Odontogenic Tumor

—新しい概念—

新潟大学歯学部口腔病理学教室

福 島 祥 紘

歯原性腫瘍の国際的分類としては、1971年に発刊されたWHO分類が一般的である。しかし、この分類が究極的に勝れたものであるとは言えず、その後も研究者による数々の模索が続いている。これは、歯原性腫瘍の殊に生物学的側面に対する理解が未だ充分でないことをも示唆しているようである。

Squamous Odontogenic Tumor (以下 SOT と略) もその模索の一つと言えよう。SOT は 1975 年に米国の Pullon らにより提唱された新しい概念で、主として組織学的診断の立場から従来の診断基準の中にどうしても入らないという事で新しく命名されたものである。この SOT は、萌出歯根に隣接した三角形ないし類円形の骨透過像を X 線写真上の特徴とし、組織学的には重層扁平上皮の包巢実質と成熟した線維性結合組織を有する良性腫瘍性病変と考えられている。どういうわけか、従来の分類では顎骨内の重層扁平上皮性良性腫瘍は、エナメル上皮腫 (Acanthomatous 型) かその扁平上皮化生しかない為に、Pullon が発表した 6 例も Benign epithelial odontogenic tumor とか Acanthomatous ameloblastoma と呼ばれていたようである。Pullon はこれらの化生や acanthomatous type では、包巢の基底側細胞が円柱状または立方状で正常の内エナメル上皮に一部でも類似性が認められるのに対し、SOT では基底細胞からすべて扁平上皮であることをもってその違いとしている。

さて 1982 年までの間に世界中で報告されている (SOT の名で) 症例は 20 例あり、その他嚢胞壁に発生した SOT とされているものが 6 例 (dentigerous cyst 4 例, keratocyst 1 例, lateral radicular cyst 1 例) ある。

Goldblatt (1982) は疑わしい例を除いた 16 例についてまとめているが、それによると、年齢は 11 歳から 67 歳まで (20 台にピークがある)。男 5 女 11 例。多発性に来たものが 3 例、上顎は 16 例中 10 例で、犬歯小臼歯部に、下顎は 8 例で小臼歯大臼歯部に多発している。16 例 6 中は歯槽骨の破壊を伴ない内 3 例は近接軟組織内へ浸潤している。また 16 例中 4 例は口蓋、上顎洞、鼻腔底、鼻棘へと浸潤している。症状としては歯牙の動揺が半数にみられそのまた 20% はそれ以外に症状を示していなかった。

痛みは 4 例にあったが、何の症状を示さないものも 2 例あった。

X 線的には 1 例が多房性透過像を示した他は 15 例単胞性類円形・三角形の透過像を示しその辺縁には radiodense zone があったという。しかし、歯根吸収は 1 例のみにしか認められなかった。

組織学的には円柱状の基底細胞層を欠いた扁平上皮の増殖で、しばしば微小嚢胞を伴ない上皮層内に PAS(+) の crystalloid 構造を示すが角化は明らかでなく、層状石灰化を伴うことがある。間質は成熟コラーゲン線維に富んでおり粘液腫様変化や inductive change はない。

予後は悪くないが、正確な予後追跡はあまりなされていないようである。

組織発生については Malassez 残存上皮由来と考えるのが一般のようである。

ところで、以上の SOT 症例はいずれも組織学的には類似性が高いけれども、その臨床所見は歯根肉芽腫などの炎症疾患と臨床診断されたものから骨破壊の強い腫瘍性格を有するものまで変化に富んでいる。更に、嚢胞壁から発生した症例について文献上から判断すると明らかな過形成の例もあると考えられる。Pullon 自体の提出した症例も極めて小さい例が多く、顎骨内浸潤というよりは歯槽骨吸収と表現すべき例もみとめられる。更に全例に炎症が随伴し、1 例の臨床診断は歯周炎なのである。上下顎それも左右とすべての歯槽骨吸収破壊を伴う例については、これを腫瘍としてどうして判断するのか迷うわけで、骨髓炎などに伴う上皮増生を推測して悪い理由がないように思われる。

とにかく、新病変が提案されると次第に拡大解釈され、類似組織像を示すものは何でもその範疇に入れられてしまい、その結果、従来の分類病変との境界があいまいになる傾向がある。SOT においても、腫瘍性病変と反応性病変とについて厳密な判断が求められるだろう。

## 文 献

- 1) Pullon, P. A. et al.: Squamous odontogenic tumor. Report of six cases of a previously unnamed lesion, Oral Surg. **40**: 616-630, 1975.
- 2) Goldblatt, L. I. et al.: Squamous odontogenic tumor: Report of five cases and review of the literature. Oral Surg. **54**: 187-196, 1982.